住井すゑとその文学の里（二十八）

―牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

毎日新聞記者【増田れい子】
―大手紙初の女性論説委員に―（後編）

昭和28年（1953年）4月、毎日新聞社入社式が古びた講堂で行われた。式後、増田には東京本社見習生とする〝辞令〟が手渡された。

全社で50人の新採用記者の中に女性は二人いた。増田の同僚として入ったもう一人の女性記者Nさんは、学芸部記者となった後、結婚。夫の外地勤務を機に退社した。

増田は、「政治部で働きたい」と申し出るが、受け入れられず、社会部に配属され、都庁クラブ詰めからスタートする。

社会部所属は3年で、サンデー毎日編集部に移った。同編集部は有楽町の旧社屋4階にあった。昭和36年（1961年）春、長期連載物の『川は生きている』で多摩川の取材に出るが、天険に阻まれて目指す大菩薩峠（だいぼさつとうげ）の多摩川源流にたどり着くことができなかったという苦い経験をした。増田は、編集部遊軍記者兼映画演劇記者で、昭和41年（1966年）の秋、輸入映画『オセロ』にちなんだ初めての海外取材の旅に出た。『オセロ』の主役、かの名優サー・ローレンス・オリヴィエのインタビューにも成功した。また昭和40年（1965年）10月21日号から3年余り、ノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎（ともながしんいちろう）氏をはじめ、女性高級官僚、雑誌編集者、本因坊（ほんいんぼう）（林海峯（りんかいほう）氏）、俳優（吉永小百合氏）、映画監督（小津安二郎、山田洋次両氏）、作曲家（吉田正氏）、作家（司馬遼太郎氏）、漫画家、評論家、女性デザイナー（森英恵氏）、カメラマン（篠山紀信氏）、歌手、東京都知事（美濃部亮吉氏）ら、各界著名人とのインタビュー記事も書く。

昭和44年（1969年）の春、母住井すゑの〝一生をかけた大仕事、部落差別の根源を告発する〟大河小説『橋のない川』第一部が、今井正監督の手で映画化され、大ヒットした。増田はこの映画について同年3月17日号に5ページの特集記事を書いている。ちなみに現在、テレビコメンテーターとして活躍中の鳥越俊太郎氏もサンデー毎日編集部に所属したことがある。

昭和49年（1974年）9月、増田は、通算18年を過ごしたサンデー毎日編集部から、図書第一編集部副部長、デスクに就く。毎日新聞社では初めて女性が管理職の副部長職に就いた出来事であった。さらに増田は、昭和58年（1983年）6月に論説委員兼務となり、内濠（うちぼり）と東御苑（ひがしぎょえん）に連なる北の丸公園の緑まで視野に入るパレスサイドビル4階の西端にある論説委員室にデスクを持った。入社当時、最終職場は論説がいいなと思ってから30年目にあたっていた。総勢20人の論説委員の中には政治論説担当の岩見隆夫氏がいた。女性論説委員は、毎日新聞の歴史始まって以来のことで、大手紙では増田が初登場であった。論説委員としての増田は主として『女性差別』にかかわる問題を手掛け健筆を振るった。その一方で増田は、昭和57年（1982年）から月1回発行のユニークな『女のしんぶん』を創刊、編集長（百号で終刊となる）を務めた。昭和59年には女性で初めて日本記者クラブ賞を受賞した。定年後は毎日新聞社特別嘱託として在社し、平成2年（1991年）に通算38年の記者生活を終わった。

その後の増田は、幅広い分野の執筆と講演の日々を送っている。

➡毎日新聞社ビル
―毎日新聞社提供―